

巻 頭 言

長野県視覚・放送・情報教育研究会

会長 桂本 和弘

(長野県小学校長会長)

昨年度は、上田の地で4年ぶりとなる、参集による令和6年度関東甲信越放送・視聴覚教育研究大会を開催でき、多くの成果を収めることができました。大会運営に携わった全ての先生方のご尽力のおかげで、たいへん有意義な大会となりました。改めて感謝申し上げます。心に残っているのは、小学校、中学校での公開授業での児童生徒の姿です。タブレット端末を使いこなす姿は、さすが現代を生きる子どもだと感じました。大会主題「自ら考え、自ら学び、未来を切り拓く子どもの育成～確かな学びと豊かな心を育む教育メディアの活用～」に基づき取り組んで来られた、上田市内10校園の研究授業と関東甲信越各地の先生方の実践レポートを基に、充実した協議がなされました。それぞれの授業会場では、ICT機器を積極的に活用することで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践を通し、すべての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びの実現に向けた一人一台端末の有効活用について、提案性のある授業を数多くみることができました。また、分科会においても、発表レポートを基に、教育メディアの効果的な活用とICTの果たす役割について、活発な議論が展開されておりました。また、EXILE TETSUYA氏による「映像で伝えるダンス教育の表現」と題し特別講義いただきました。TETSUYA氏を含めた3人での対談、地元中学生のダンスパフォーマンスの披露を通して、映像教材の効果的な活用について多くの学ぶべきことをご示唆いただきました。



さて、5月に文科省の教育課程課長の講義を聞く機会がありました。その中で、GIGAスクール構想の効果的な活用は緒に就いたばかりであること、デジタルの力でリアルな学びを支えるという基本的な考えに立つこと、つまり、適度に賢く使う、適切かつ多様なベストミックスが大切であると言っていました。背景には、日本の子どもたちは、他国に比べ、ネット情報の信頼性についての確認の割合や偽・誤情報の認識率が大変低いことが挙げられていました。つまり、端末である事柄を検索した時に、その情報が全てだと思い、疑うことなく自分の意見として伝えている授業があるのではないかということです。裏を返すと日本の子どもたちには、今後、批判的思考の育成が益々必要になってくると言うことでもあります。そんな中、ICTが馴染んだ教室では、紙かデジタルかを子どもが決める。画像検索でイメージを膨らめる、クラウドで共有し全員で真偽を検証する(しかも早い)という、デジタルの強みを上手く活用している教室も増えてきているそうです。さらに、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図っている学校ほど、ICT機器を活用している傾向であり、その中の子どもたちは、ICT活用に効力感を感じているそうです。それだけに、視覚・放送・情報研究会の果たす役割、研究成果の共有は、期待と同時に大きな使命となってきています。

今年度の第57回長野県視覚・放送・情報教育研究大会下伊那大会は、11月6日(木)に開催されます。「情報メディアを有効に活用し、一人ひとりの子どもに確かな学力を身につけ、心豊かな人間性の育成を目指す」を大会主題として行われます。昨年度の成果を踏まえ、研究の視点を明確にし、その成果を県下の学校や先生方に広く周知、伝達され、教職員の資質や能力の向上に寄与することを願っております。大会開催にあたり、ご指導ご支援をいただいております長野県教育委員会をはじめ、長野県市町村教育委員会連絡協議会、飯伊市町村教育委員会連絡協議会、松川町、高森町、喬木村、豊丘村、大鹿村各教育委員会、教育関係諸団体の皆様に心より感謝申し上げます。また、大会推進・運営委員会、各授業会場校等、準備を進めて下さっている多くの皆様に厚く御礼申し上げます。